

福岡県筑前海域における中型まき網漁業の マアジ漁獲と出荷状況

有江 康章・渡邊 大輔
(企画管理部)

Catching and transport of horse mackerel by middle-scale surrounding net fisheries in Chikuzenkai in Fukuoka

Yasuaki ARIE, Daisuke WATANABA
(Research Planning and Control Department)

マアジは、福岡県筑前海域において中型まき網、浮敷網、釣り、定置網と多くの漁業の主要漁獲物である。同海域におけるマアジの漁獲量は2,753~6,695トン(1995~1997年)と魚類総漁獲量の15~27%を占めており、その経済的価値の高さから重要視されている魚種の一つである。

また、マアジは1997年1月からマイワシ、サバ類(マサバ及びゴマサバ)とあわせて、漁獲可能量管理制度(TAC制度)の対象魚種に指定され、当県においては中型まき網漁業で漁獲されるマアジが具体的な数量規制の対象となった。

現在、福岡県では管理計画の作成とTAC制度の円滑な遂行を目的として、管理対象魚種の漁獲・出荷・流通の状況及び管理対象漁業の操業や経営実態を明らかにする調査を実施している。

ここでは、福岡県筑前海域で操業する中型まき網漁業によるマアジの漁獲状況と出荷先、出荷形態について報告する。

方 法

1. 漁獲状況

福岡県筑前海域におけるマアジの漁業種類別漁獲量の推移については、福岡農林水産統計年報¹⁾(1988~1997年)の資料を用いた。また、まき網漁業の月別マアジ漁獲量の推移については、県漁政課が集計した資料(1997, 1998年)を用いた。

当海域における中型まき網漁業の経営体数は、宗像郡玄海町の鐘崎漁協が3経営体、同郡大島村が4経営体、遠賀郡岡垣町の波津漁協が1経営体、福岡市の福岡市漁協

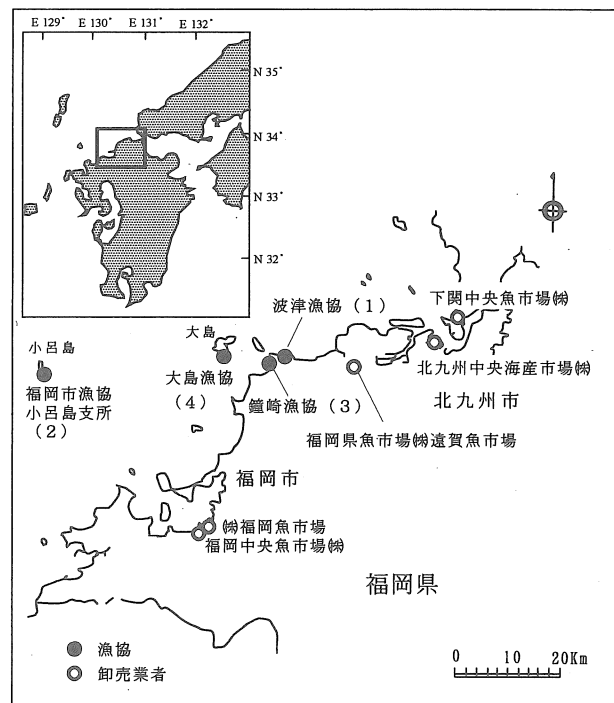


図1 調査対象漁協と卸売業者の所在地
()は中型まき網漁業の経営体数

小呂島支所(以下、小呂島支所)が2経営体の合計10経営体である。調査の対象として、同じ漁協に所属するまき網経営体は、船団の規模や漁場範囲、操業回数等が類似しているため各漁協から1~2経営体(鐘崎漁協:2経営体、大島漁協:2経営体、波津漁協:1経営体、小呂島支所:1経営体)を標本として抽出した。

図1に調査対象漁協と漁獲物の出荷先である卸売業者の所在地を示した。

中型まき網漁業によるマアジの漁獲状況を明らかにす

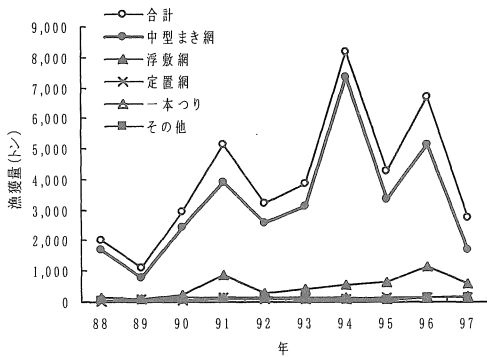


図2 福岡県筑前海域における漁業種類別マアジ漁獲量の推移

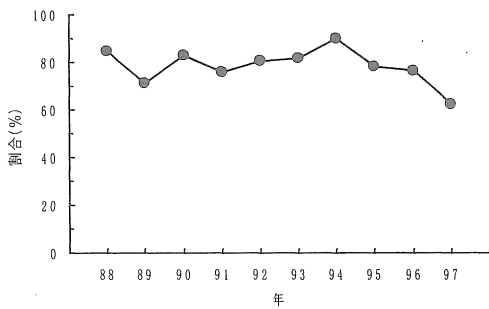


図3 マアジ漁獲量に占める中型まき網漁業の割合

るためには、経営体ごとの操業範囲や出漁日数、操業回数などの操業特徴を明らかにしておく必要がある。そこで、TAC制度が導入された1997年の操業日誌と出荷仕切書を基に各経営体の操業特徴を整理した。さらに、マアジとその他の魚種に分けて水揚金額を月別に集計し、経営体ごとに比較した。

2. 出荷状況

(1) 1箱当りの収容重量

通常、中型まき網漁業で漁獲されたマアジは、木製の魚函（トロ箱）に収容して運搬・出荷される。木製魚函1箱に収容される重量については、鐘崎漁港に水揚され、トラックに乗せる直前のものを対象に計測（調査期間：1996～1998年）した。

(2) 卸売業者別の出荷割合

出荷金額については、マアジとその他の魚種に分けて集計した。また、出荷箱数と単価（円/箱）については木製魚函のみを対象とした。資料は、ともに1997年の出荷仕切書を用いた。

(3) 銘柄別の出荷割合

出荷仕切書には、マアジの銘柄が記載してあるものがあったが、表示と銘柄数が卸売業者間で大きく異なっていた。また、銘柄の替わりに入数（1箱に入っているマ

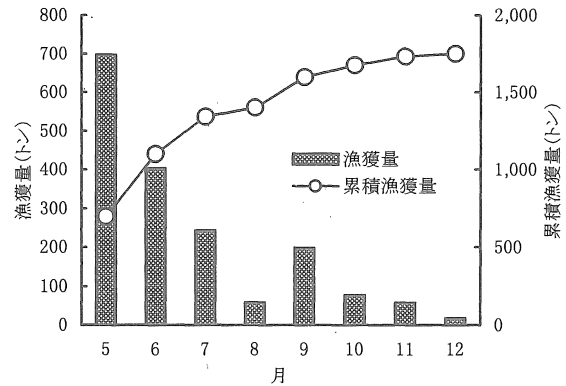


図4 中型まき網漁業の月別漁獲量と累積漁獲量の推移(1997)

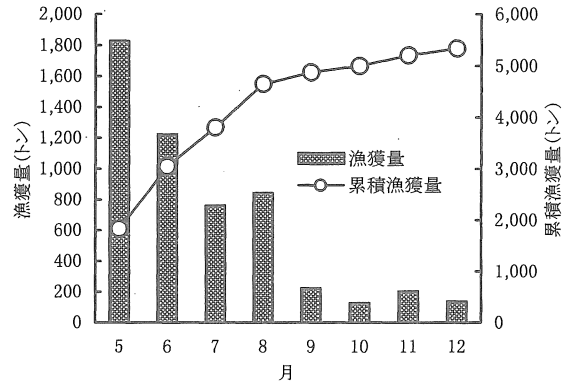


図5 中型まき網漁業の月別漁獲量と累積漁獲量の推移(1998)

アジの尾数) で表示している業者もあった。このように統一された銘柄が使用されていないため、銘柄別の出荷状況を直接、業者間で比較することはできない。そこで、各業者の銘柄を新たに4銘柄（基準銘柄：大、中、小、小小）にグループ化して比較を行うことにした。調査対象は、銘柄がよく記載してある下関中央魚市場㈱と㈱福岡魚市場、および入数が記載してある福岡中央魚市場㈱を多く利用していた鐘崎漁協の2経営体とした。なお、銘柄の記載がないものは、その他として集計した。

結果

1. 漁獲状況

図2に近年10ヶ年（1988～1997年）における福岡県筑前海域の漁業種類別マアジ漁獲量の推移を、図3にマアジ漁獲量に占める中型まき網漁業の割合を示した。当海域におけるマアジの漁獲量は1994年までは増減しながら増加傾向にあり、1994年には8,153トンに達した。しかし、その後1995年、1997年と大きく漁獲量が減少し、この10ヶ年に漁獲量は1,090～8,153トンと約7.5倍の変動をしていた。また、中型まき網漁業による漁獲量も全体と同様の増減傾向を示し、773～7,344トンと約9.5倍の変動をしていた。一方、中型まき網漁業によるマアジの漁獲量は全体の62～90%と高い割合を占めていた。

次に、図4、5に1997年と1998年における月別漁獲量と累積漁獲量の推移を示した。月別漁獲量の推移を両年で比較すると、1997年は合計が1,751トン、1998年は5,340トンと年間漁獲量に約3倍の差が生じていたが、操業開始の5月から終了する12月まで月別の漁獲量と累積漁獲量の推移傾向は同様であった。両年で傾向が大きく異なる部分は、1997年の8月の漁獲量が少なく、逆に1998年は多かったことである。

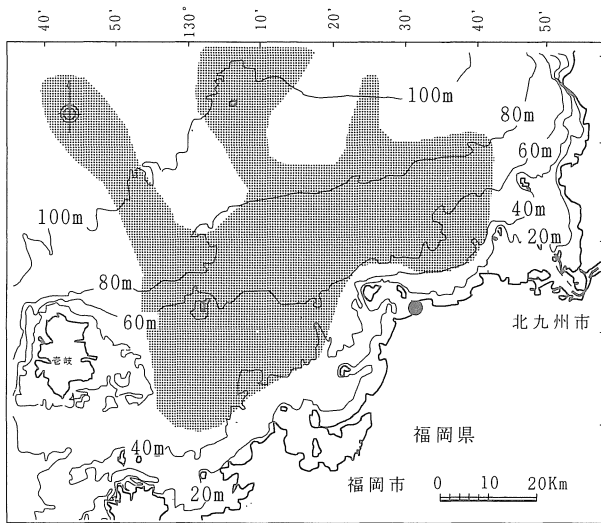
続いて、中型まき網漁業の標本経営体における操業状況を表1に示した。ただし、総水揚金額は消費税抜き、また市場での箱・氷代や手間賃等は控除していない。

当海域における中型まき網漁業の操業期間は、許可方

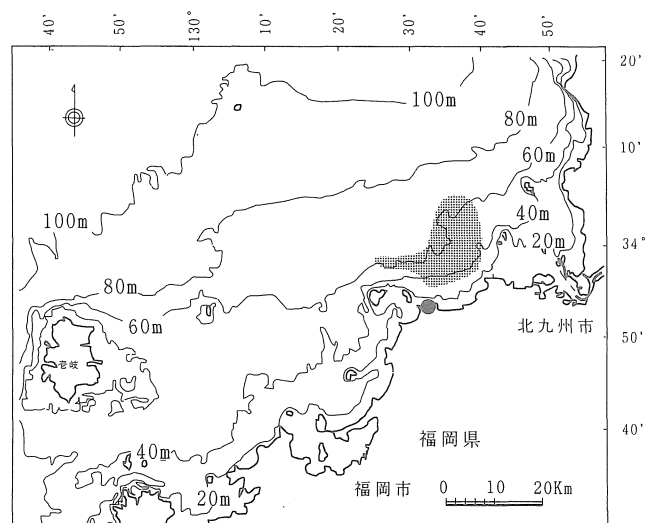
表1 中型まき網漁業の操業状況 (1997)

金額単位：千円

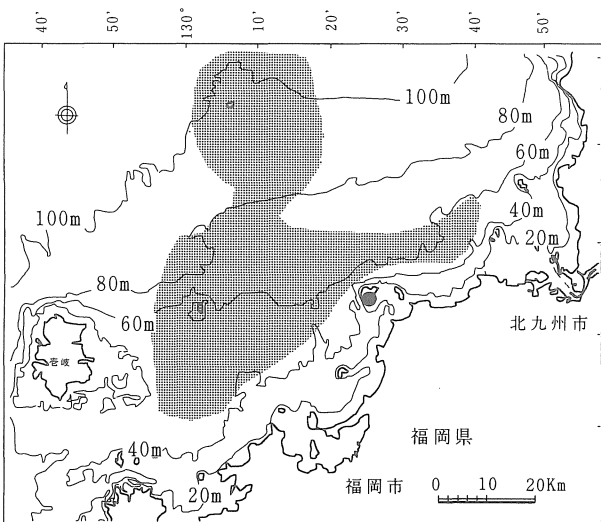
漁協	鐘崎	鐘崎	波津	大島	大島	小呂島支所
標本経営体	A	B	C	D	E	F
総水揚金額(a)	392,560	379,158	52,110	231,161	192,678	170,560
出漁日数(b)	81	80	47	85	81	79
操業回数(c)	327	330	75	213	206	189
1出漁当りの操業回数(c/b)	4.0	4.1	1.6	2.5	2.5	2.4
1出漁当りの総水揚金額(a/b)	4,846	4,739	1,109	2,720	2,379	2,159
1操業当りの総水揚金額(a/c)	1,200	1,149	695	1,085	935	902
経営方法	個人	個人	共同	共同	共同	漁協



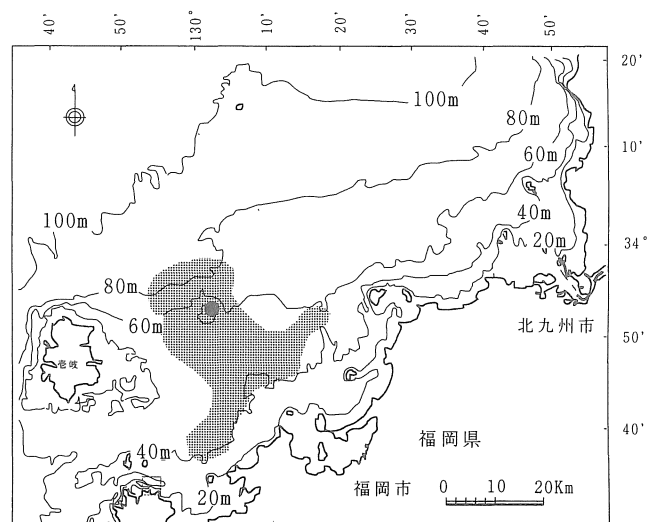
鐘崎漁協 (A, B 経営体)



波津漁協 (C 経営体)



大島漁協 (D, E 経営体)



小呂島支所 (F 経営体)

図6 中型まき網漁業の操業範囲(1997) ●は漁協の所在地

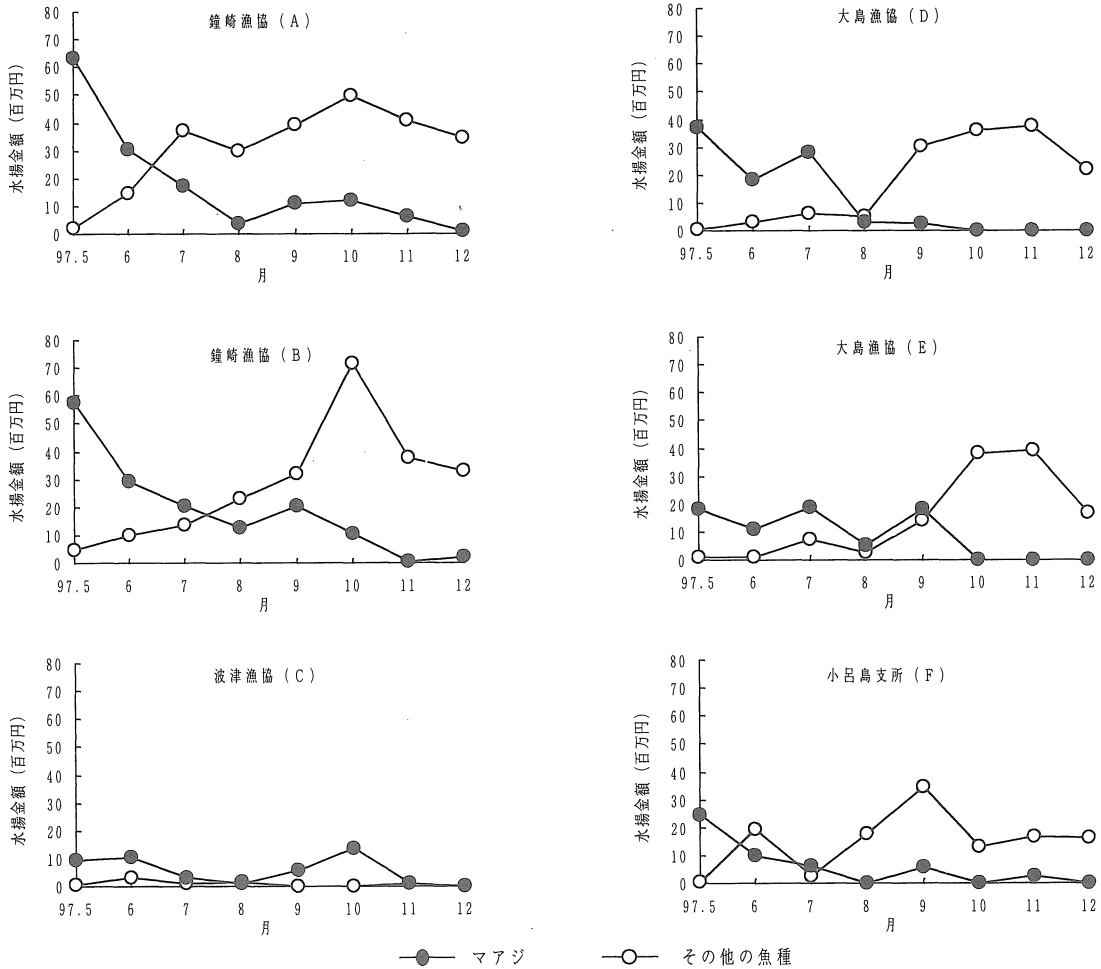


図7 中型まき網漁業の月別水揚金額の推移(1997)

針により5~12月と定められており、標本経営体の全てがこの期間に操業を行っていた。しかし、水揚金額は52,110~393,560千円、出漁日数は47~85日、操業回数は75~330回と経営体により大きな差が認められた。

1出漁当りの操業回数は、鐘崎漁協が4.0、4.1回、大島漁協がともに2.5回、小呂島支所が2.4回、波津漁協が1.6回と大きな差が認められた。次に、収益性を示す1操業当りの総水揚金額は、鐘崎漁協のA経営体が1,200千円と最も高額で、逆に最も低かったのが波津漁協のC経営体であった。表1に示した全項目で鐘崎漁協が高く、逆に波津漁協が低い傾向であった。

図6に中型まき網漁業の操業範囲を漁協ごとに示した。鐘崎・大島漁協は、当海域全体を広く漁場として利用しているが、鐘崎漁協の方が水深100m以深の海域も含め、より広い範囲を漁場としていた。一方、波津漁協は、漁協地先の水深60m以浅の狭い範囲しか操業していなかった。また、離島である小呂島支所は、島の周辺20Km以内と西部沿岸域の水深40~60m海域を漁場として利用していた。

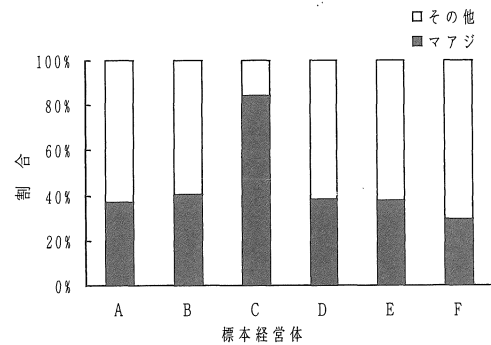


図8 総水揚金額に占めるマアジの割合 (1997)

図7に各経営体におけるマアジとその他の魚種の月別水揚金額を示した。波津漁協のC経営体を除く5経営体は、漁期前半の5~7月はマアジを、漁期の後半にはマアジ以外の魚種を多く水揚げする傾向がうかがえる。特に、鐘崎と大島漁協の4経営体は、その傾向が明瞭である。波津漁協のC経営体は、水揚金額は少ないが、操業期間を通してマアジの水揚金額の方がその他の魚種より多かった。

図8に総水揚金額に占めるマアジの割合を示した。マ

アジの占める割合が最も高かったのは、C経営体の85%で、逆に、最も低かったのは29%のF経営体であった。鐘崎・大島漁協の4経営体(A～D)は37～40%であった。

2. 出荷状況

(1) 1箱当りの収容重量

表2にマアジの1箱(木製魚函)当りの収容重量を銘柄別に示した。1箱当りの重量は、17～22Kg, 平均は20Kgであった。銘柄別の平均重量は、18～20Kgと2Kgの差があった。

(2) 卸売業者別の出荷割合

表3に標本経営体における卸売業者別のマアジとその他の魚種の出荷金額と割合を示した。

まき網漁業による漁獲物の出荷は、操業が夜間に行われるため、通常は、真夜中から早朝にかけ数回に分けて行われる。鐘崎と波津漁協の一般的な出荷は、漁獲物を運搬船で各自の漁港に水揚げし、選別・箱入れした後にトラックで陸送する方法を採用している。聞き取り調査に

よると、出荷先は、その日の漁獲量、漁獲物の種類・サイズ、水揚げ時間、前日の相場等を考慮して決定しているとのことであった。また、漁港に水揚げすると市場のセリに間に合わない場合は、運搬船で直接市場へ出荷する場合もある。一方、大島漁協と小呂島支所は離島であるため、全ての漁獲物を運搬船で直接市場へ輸送し、市場の岸壁で荷役業者が選別・箱入れをした後に出荷する方法を採用している。

1997年における標本経営体の出荷先は、下関中央魚市場(株)、北九州中央海産市場(株)、(株)福岡魚市場、福岡中央魚市場(株)、福岡県魚市場(株)遠賀魚市場の5業者であったが、(株)遠賀魚市場は鐘崎漁協が僅かに利用しているのみであった。

鐘崎漁協のAとB経営体のマアジ、その他の魚種における各出荷先の金額比率を比較するとよく類似していた。両経営体は、下関中央魚市場(株)へマアジの6割以上を出荷していたが、その他の魚種は僅か2割台であった。

波津漁協のC経営体は、AやB経営体と同様に出荷はトラックで行っているが、利用するのは下関中央魚市場(株)、北九州中央海産市場(株)、(株)福岡魚市場の3業者に限っていた。中でも(株)福岡魚市場への出荷が多く、マアジの約8割、その他の魚種でも約6割を占めていた。

大島漁協のDとE経営体は、下関中央魚市場(株)、北九州中央海産市場(株)、(株)福岡魚市場、福岡中央魚市場(株)の4業者を利用しているが、(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)で9割以上を占めていた。さらに、D、E経営体は離島という条件のため、漁獲物を運搬船で直接市場へ出荷しなければならず、A～C経営体と異なり特定の魚種を選択的に出荷することが不可能である。従って、マア

表2 マアジの1箱(木製魚函)の収容重量

単位: kg

銘柄	測定数	最小	最大	平均
大	3	17	20	18
中	5	19	21	20
小	5	19	21	20
豆スーパー	4	18	20	18
その他	8	17	22	20
全体	25	17	22	20

(鐘崎漁協, 1996～1998)

表3 中型まき網漁業におけるマアジとその他の魚種の卸売業者別出荷金額の割合(1997)

単位: 千円, (%)

標本営業体 区分	A(鐘崎)		B(鐘崎)		C(波津)		D(大島)		E(大島)		F(小呂島支所)	
	マアジ	その他	マアジ	その他	マアジ	その他	マアジ	その他	マアジ	その他	マアジ	その他
下関中央魚市場(株)	92,079 (63.5)	54,751 (22.1)	102,501 (66.8)	46,105 (20.4)	7,904 (17.9)	2,227 (27.6)	7,930 (8.9)	8,278 (5.8)	0 (0.0)	7,055 (5.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
北九州中央海産市場(株)	15,140 (10.4)	20,326 (8.2)	17,546 (11.4)	17,091 (7.6)	525 (1.2)	1,011 (12.5)	0 (0.0)	1,380 (1.0)	0 (0.0)	595 (0.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
(株)福岡魚市場	29,401 (20.3)	103,658 (41.9)	27,565 (18.0)	109,308 (48.4)	35,620 (80.9)	4,823 (59.8)	23,137 (25.9)	49,611 (35.0)	46,609 (64.6)	61,553 (51.1)	45,658 (91.1)	108,238 (89.9)
福岡中央魚市場(株)	7,961 (5.5)	68,845 (27.8)	4,624 (3.0)	50,365 (22.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	58,148 (65.2)	82,677 (58.2)	25,536 (35.4)	51,330 (42.6)	4,468 (8.9)	12,197 (10.1)
福岡県魚市場(株)遠賀魚市場	347 (0.2)	52 (0.0)	1,233 (0.8)	2,820 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	144,928 (100)	247,632 (100)	153,469 (100)	225,689 (100)	44,049 (100)	8,061 (100)	89,215 (100)	141,946 (100)	72,145 (100)	120,533 (100)	50,126 (100)	120,435 (100)

表4 マアジの卸売業者別出荷箱数と平均単価（1997）

平均単価：円／箱

標本経営体 項目	A（鐘崎）		B（鐘崎）		C（波津）		D（大島）		E（大島）		F（小呂島）	
	箱数	平均単価	箱数	平均単価	箱数	平均単価	箱数	平均単価	箱数	平均単価	箱数	平均単価
下関中央魚市場(株)	8,703	10,600	11,062	9,300	807	9,800	357	22,200	—	—	—	—
北九州中央海産市場(株)	2,235	6,800	2,547	6,900	51	10,300	—	—	—	—	—	—
(株)福岡魚市場	4,574	6,400	5,044	5,500	5,360	6,600	2,548	9,100	5,073	9,200	4,576	10,000
福岡中央魚市場(株)	1,305	6,100	1,112	4,200	—	—	5,534	10,500	2,650	9,600	499	9,000
福岡県魚市場(株)遠賀魚市場	178	1,900	390	3,200	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	16,995	8,500	20,155	7,600	6,218	7,100	8,439	10,600	7,723	9,300	5,075	9,900

箱は木製魚函

ジの卸売業者別の金額比率は、その他の魚種と類似していた。

小呂島支所のF経営体は、(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)の2業者へ出荷していたが、約9割は(株)福岡魚市場であった。F経営体についてもD、E経営体と同様に離島という条件のため、魚種による卸売業者の選択性は認められなかった。

次に、表4にマアジの卸売業者別の出荷箱数と1箱（木製魚函）当りの平均単価を示した。なお、ここでは入りが少ない箱は除いて集計した。鐘崎漁協の2経営体は出荷箱数の約半分を下関中央魚市場(株)へ出荷しており、次いで(株)福岡魚市場、北九州中央海産市場(株)、福岡中央魚市場(株)、(株)遠賀魚市場の順に出荷していた。この5業者の平均単価を比較すると、下関中央魚市場(株)の単価が9,300円／箱、10,600円／箱と最も高値であった。逆に、(株)遠賀魚市場のは1,900円／箱、3,200円／箱と最も安値であった。

波津漁協のC経営体は、出荷箱数の約86%を(株)福岡魚市場へ、約13%を下関中央魚市場(株)へ、そして1%弱を北九州中央海産市場(株)へ出荷していた。この3業者の平均単価を比較すると、下関中央魚市場(株)と北九州中央海産市場(株)は9,800円／箱、10,300円／箱と高値であるが、箱数が最も多い(株)福岡魚市場は6,600円／箱と安値であった。

一方、大島漁協のDとE経営体は、多くを(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)に出荷しているが各々の占める割合は2経営体で逆となっていた。また、D経営体は、僅かであるが下関中央魚市場(株)へ出荷しており、平均単価が22,200円／箱と高値であった。大島漁協における(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)の平均単価は、9,100～

表5 中型まき網漁業で漁獲されるマアジの銘柄概要

(株)下関中央魚市場	(株)福岡魚市場	中川による銘柄区分 ²⁾				基準銘柄
		銘柄	平均尾叉長	1箱入数	推定年齢	
特大 大 大中	大 大中	大	30cm～	～40尾	3才以上	大
大小 中 中小	中 中小	中	24～30	40～100	2～3才 (2才主体)	中
並小 小小 ゼンゴ	小 ゼンゴ マゼンゴ	小	19～24	100～160	1～2才 (1才主体)	小
豆 スーパー	豆 シバアジ	マメ	～17	260～	0～1才 (0才主体)	小小

福岡中央魚市場(株)については中川による銘柄区分の1箱入数を使用して基準、銘柄に区分した

10,500円／箱と大きな差はなかった。

小呂島支所のF経営体は約90%を(株)福岡魚市場へ、残りの約10%を福岡中央魚市場(株)へ出荷しており、両市場における平均単価は9,000円／箱、10,000円／箱と大きな差はなかった。

(3) 銘柄別の出荷割合

出荷仕切書に記載してあったマアジの銘柄は、下関中央魚市場(株)が12種類、(株)福岡魚市場は9種類であった。このように各卸売業者は、マアジに対して統一した銘柄を使用していないため、単価を直接比較をすることができない。そこで、各出荷仕切書に記載してある銘柄と金額を考慮し、表5に示した新たな銘柄（基準銘柄：大、中、小、小小の4段階）にグループ化した。また、福岡中央魚市場(株)は、入数表示であるため中川による銘柄区分²⁾を参考にして基準銘柄に区分した。

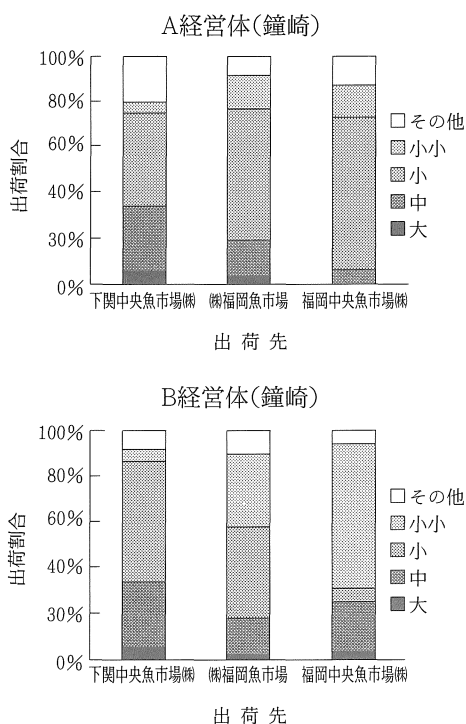


図9 マアジの卸売業者別、銘柄別の出荷箱数割合(1997)

図9にAとB経営体の3業者における銘柄別の出荷箱数の割合を示した。両経営体とも、大きいマアジは下関中央魚市場へ、逆に小さいものは福岡中央魚市場と新潟魚市場へ出荷していることがうかがえる。

考 察

1. 漁獲状況

福岡県筑前海域の近年10ヶ年(1988~1997年)におけるマアジ漁獲量は大きく増減しており、全体で約7.5倍の差が生じていた。一方、中型まき網漁業は約9.5倍とさらに大きな差が生じていた。マアジ漁獲量の6~9割は中型まき網漁業によるものであるが、図3に示すように1989年や1997年のようにマアジの漁獲量が大きく減少した年は、全体に占める割合も下がる傾向がうかがえる。

これらのことから中型まき網漁業は、漁獲対象とするマアジ資源が多いと特にマアジをねらい、逆に少ないと直ちに他の魚種を漁獲対象にするものと考えられる。中型まき網漁業が主対象とするアジ、サバ、イワシなどの浮魚資源が減少したとき、本漁業が経済的価値の高いブリ、タイ、イサキなどを漁獲対象にすることは、昭和42年頃から認められることが報告されている³⁾。

図4、5に示すように1997年と1998年は年間漁獲量に約3倍の差があったが、両年とも月別マアジ漁獲量は5~12月にかけて急速に減少していく同様の傾向を示していた。

このことから、中型まき網漁業による月別の漁獲傾向は、マアジ資源の多少に関わらず毎年同様であることが考えられる。

中型まき網漁業の操業範囲については、1980年代(1985~1989年)のものが報告⁴⁾されており、本報告(図6)と比較すると、鐘崎・大島漁協、小呂島支所については大差なかった。しかし、波津漁協は、両資料において大きな違いが認められた。1997年の漁場は、漁協地先の水深60m以浅の沿岸域に限られていたが、1980年代は、さらに水深80mの沖合まで広く操業しており、明らかに操業範囲の縮小がみられた。

また、小呂島漁協については、さらに1970年代(1972~1973年)の資料があり、島を中心に約15Kmの範囲で操業されていたと報告されている⁵⁾。1997年における小呂島漁協の操業範囲は、島の周辺20Km以内と西部沿岸域の水深40~60m海域であり、これは前述した1980年代とほぼ同じ範囲であったことから、1970年代から1980年代にかけて漁場を拡大していたことがわかる。

中型まき網漁業の操業状況(表1)と操業範囲から、当海域の中型まき網漁業は、次の3つのタイプに区別することができる。鐘崎漁協に代表される広域漁場・多回操業・高水揚型、波津漁協の地先漁場・少回操業・低水揚型および大島漁協・小呂島支所の中間型の3タイプである。特に鐘崎漁協は、1出漁当りの操業回数や1回操業当りの水揚金額で突出している。この理由として、鐘崎漁協の経営は個人(有限会社)であるため、設備投資や操業面で積極性が出やすいと考えられる。逆に、波津漁協は、上述したように操業範囲の縮小傾向も認められ、今後の経営が心配されることである。

次に、図7に示したマアジとその他の魚種の月別水揚状況から、漁期の前半は主にマアジ資源を漁獲対象にし、漁期の後半はその他の魚種を対象にしていることがうかがえる。これは、春季における来遊群(1歳魚主体)は、滞留性が弱く、夏季以降は移動してしまう。また、夏季以降は商品価値が低い0歳魚が多いといった当海域におけるマアジ資源の移動特性²⁾に起因している。

また、水揚金額の多少から、漁協を特徴づけることができる。鐘崎漁協は、マアジ資源もその他の魚類資源も積極的に利用しており、このことは、魚群を求めて広い範囲を漁場としていることの結果でもある。逆に、波津漁協は、地先に来遊してきた資源のみを漁獲しており、あえて資源を追いかけて操業範囲を広げることはしていない。大島漁協と小呂島支所は、操業範囲が異なるが同等の水揚金額をあげていることから両者は、鐘崎漁協と

波津漁協の中間型に区分できる。

2. 出荷状況

(1) 1箱当りの収容重量

中型まき網漁業により漁獲されたマアジの1箱当り(木製魚函)の収容重量は、17~22Kg(平均20Kg)で、銘柄による大きな差は認められなかった。

なお、マアジをこの重量にするためには、箱の上縁を越えて山盛りにする必要があり、この方法は、市場に出荷する際の長年の慣習となっている。輸送のためトラックへ搭載する際には、下段の魚がつぶれないように、片方の箱縁に木製の棒をかませており、作業面からは非常に不合理な慣習といえる。漁業者の話では、山盛り状態が悪い(量が少ない)と、山盛り時より単価が安くなるとの話であり、今後、市場でも調査を行いたい。

(2) 卸売業者別の出荷割合

鐘崎漁協のAとB経営体は、マアジの出荷箱数が約17,000~20,000箱と他の経営体の2~3倍と多い。また、市場への出荷は、輸送用のトラックを自前で所有あるいは運送業者に委託している。こうした背景から、マアジの出荷方針としてまず、早く水揚げしたマアジは、下関中央魚市場(株)へ優先的に出荷する。これは、このセリ開始が午前1時半と早く、仲買人にとっては早期に荷を確保することができる。また、遠方にも送れるなどの理由により高値がつくこと、また結果として、県内の他漁協との競争を避けることにもなっている。逆に、遅く水揚げしたマアジは、福岡市内の(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)へ出荷する。ここは、セリが午前中遅くまで行われており、安値でも引き取ってもらえれば良いと考えている。また、出荷にはトラックがあるため、その機動力を利用してセリ値の模様眺めで他の卸売業者へも出荷を行っている。

次に、大島漁協と小呂島支所のD~F経営体は、離島であるため、基本的には、漁獲物を未選別のまま、運搬船で出荷する方法しか採れない。従って、現在は選別、箱入れ作業の受け入れ体制が整っている福岡市内の(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)の2業者へほとんどを出荷している。今後、他の市場においても運搬船での入荷受け入れ体制を整えば、離島漁協における出荷割合は大きく異なることが考えられる。

波津漁協のC経営体は、漁協のトラックを利用して、鐘崎漁協と同様に陸上輸送で出荷しているが、出荷先は3ヶ所と少なく、中でも(株)福岡魚市場への依存が高い。

以上の出荷面から漁協を特徴づけると、出荷にトラッ

クを用い、複数の卸売業者に出荷する多様型(鐘崎漁協)、同様にトラックを利用するが出荷先が(株)福岡魚市場に著しく偏っていた単純型(波津漁協)、および運搬船の受け入れ体制が整っている所にしか出荷できない離島型(大島漁協、小呂島支所)の3つに区分される。

また、各漁業者の聞き取り調査では、漁業者は卸売業者からより良いサービス(せりの順番を早くして高値が出やすくする、大量に魚が獲れても引き取る、出荷が遅くても受け取るなど)を期待し、逆に、卸売業者も荷を確保するため、常連の漁業者にはサービスを厚くするといった長年の付き合いがあり、基本的には出荷先の固定化、漁業者の顧客化が進んでいるようである。

今回調査した、マアジの出荷先については、単年であったため引き続き調査を実施し、出荷の実態を明らかにしたい。

(3) 銘柄別の出荷割合

図8に示すように、鐘崎漁協のAとB経営体は大きいマアジを下関中央魚市場(株)へ、逆に小さいものを福岡中央魚市場(株)と(株)福岡魚市場に出荷していることが伺える。このことが、表4に示すAとB経営体の福岡中央魚市場(株)と(株)福岡魚市場の平均単価が、(株)下関中央魚市場より安値になる要因の一つと考えられる。

また、AとB経営体は、漁獲物を所属漁港に水揚げし、漁獲物の魚種・サイズや各市場の値動きをにらみながら積極的に出荷先を選択できるように専用のトラックを確保して努力している。その成果として下関中央魚市場(株)では約1万円/箱の高値で取り引きされていた。しかし、(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場(株)に関しては、約4~6千円/箱で取り引きされており、D~F経営体の約9~10千円/箱と比較するとかなり安値で取り引きされていた。これについても出荷される銘柄の違いが要因の一つであると考えられる。

さらに、安値の要因として出荷の時間帯(セリ時間)が考えられる。セリの時間が遅くなると参加する仲買人も減り、セリ値が安くなることが考えられる。しかし、波津漁協のC経営体については、表1に示すように1出漁当りの操業回数が少なく、早い時間に出荷することが可能であるが、(株)福岡魚市場では6,600円/箱と安値で取り引きされていた。

値段は、出荷先を決定する重要な因子であるため、出荷時間(セリ時間)と単価の関係及びC経営体の安値の原因については今後の調査で明らかにしたい。

要 約

- 1) 中型まき網漁業は、マアジ漁獲量の6～9割を漁獲しており、マアジ資源が減少すると他の経済的価値の高い魚種を漁獲対象としていた。
- 2) 中型まき網漁業によるマアジの月別漁獲パターンは、資源の多少にかかわらず同様な傾向を示し、5～7月の3ヶ月で年間の7割、9月までの5ヶ月で9割を漁獲していた。
- 3) 当海域の中型まき網漁業は、操業面、水揚金額面から、広域漁場・多回操業・高水揚型の鐘崎漁協、地先漁場・少回操業・低水揚型の波津漁協、および中間型の大島漁協・小呂島支所の3タイプに区分できる。
- 4) 中型まき網漁業の総水揚金額に占めるマアジの割合は波津漁協の85%以外は29～40%であった。
- 5) 鐘崎漁協における出荷の基本方針は、早く水揚げしたものは高値ねらいと他漁協との競争を避けるため下関中央魚市場^(株)へ出荷する。一方、水揚げが遅くなったものは安値でも、遅くまでセリが行われる福岡市内の2業者へ出荷することである。
- 6) また、下関中央魚市場^(株)には大型サイズのマアジを、逆に^(株)福岡魚市場と福岡中央魚市場^(株)には小型サイズを多く出荷していた。

- 7) 大島漁協と小呂島支所は離島であるため、未選別のまま運搬船で出荷しなければならず、受け入れ体制が整っている福岡市内の2業者に出荷していた。
- 8) 出荷面から、トラックを利用し、複数の市場へ出荷する多様型（鐘崎漁協）、同様にトラックを利用するが出荷先が^(株)福岡魚市場に偏っている単純型（波津漁協）、および運搬船の受け入れ体制で出荷先が制限される離島型（大島漁協・小呂島支所）の3タイプに区分できる。

文 献

- 1) 九州農政局福岡統計情報事務所：福岡農林水産統計年報水産編，第36～45次，(1988～1997)。
- 2) 中川 清：筑前海区におけるマアジの漁獲特性。福岡県福岡水試研報，15,9-16(1989)。
- 3) 三井田恒博，古田久典，森田正博：筑前海におけるまき網漁業の生産と漁場利用。福岡県福岡水試研業報，昭和52年度，7-34(1979)。
- 4) 中川 清，大村浩一，秋元 聡：まき網漁業の漁場利用，生産と魚礁との関係。福岡水海技セ研報，1,51-61(1993)。
- 5) 力武秀夫：離島漁業振興対策調査—小呂島を対象として—，福岡県福岡水試研業報，昭和48年度，100-111(1975)。